大乱闘スマッシュブラザーズX　破創の化身と希望の戦士たち

ピノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大乱闘スマッシュブラザーズＸ　破創の化身と希望の戦士たち

【Ｎコード】
Ｎ２３３３Ｙ

【作者名】
ピノ

【あらすじ】
それは亜空軍事件から２ヵ月後…

創造の化身マスターハンドと破壊の化身クレイジーハンドは
タブーに滅ぼされたところ（エインシャイン島など）を復元し、

タブーが作り上げた計画の一部（亜空間爆弾工場など）を破壊し、世界を元の姿に戻していた。

そして最後に彼らはタブーに亜空間として乗っ取られていた自分達の部屋「終点」を
復元し、世界を完全に元に戻したのだった。

しかし実はまだタブーは滅びていなかった。

タブーは終点（元亜空間）で自らを小さな玉に封印し、復活のタイミングを図っていた。

そしてタブーは上手く復活し、クレイジーハンドに憑き、マスターハンドの力を奪い取り、第二の世界征服を開始した。

そして暴走したタブーによって世界はまたメチャクチャに…

さあ、力を奪われた神の運命やいかに…！？

序章　～タブーの復活～（前書き）

警告

ここではスマブラXのオリジナル小説を書いています＾＾

隠しキャラなどのネタバレがあるのでネタバレを好まない方は注意してください。と言うより亜空の使者をクリアしていない、あるいは知らない方が呼んでも分からないと思います…。

マニアックですいません…。

序章　～タブーの復活～

ここは何も無い闇の空間…

ニヒルで暗く、ただ闇が広がる寂しい空間…

そこに今何かが現れようとしていた・・・

巨大な左手
「うぐぁあああああぁぁぁぁぁ！！」

巨大な右手
「ぅう…　やっと我らの部屋へ戻ってこれたか・・・」

巨大な左手
「何とかなったようだな・・・」

突然その闇の空間にどこからとも無く巨大な白い右手と左手が現れた。

右手が創造の化身マスターハンド、左手が破壊の化身クレイジーハンドだ。（以後Ｍハンド、Ｃハンド）

そう、この闇の空間は彼らの部屋だったのだ。

Cハンド
「何も無いな・・・」

Mハンド
「タブーめ…我らの部屋を亜空間にし、世界征服をもくろむとはふざけた真似を…。」

Cハンド
「ともかく復元しよう。さあ、やってくれ」

Mハンド
「あぁ。」

そう言うとMハンドはパチりと指を鳴らした。

パアアアアアアアア！！

すると辺りがまばゆく光り、彼らの部屋が復元された。
…とは言っても平らな台の様なものが現れただけだったが。

この台は彼らの世界の戦士達に「終点」と呼ばれている。

Cハンド
「見事だ。力は衰えていないようだな…」

Mハンド
「あの程度のことで衰えるほど弱くは無い。我らは2体で1体だ。創造の化身である我が必要なものを作り、代わりに必要の無いものをそなた（クレイジーハンド）が破壊する…。どちらかが欠ければ世界のバランスが崩れてしまう。やはりあの程度のことでやられる訳にはいかないのだ。…勝てなかったのは事実だがな…」

Cハンド
「はっはっは、そうだな。ん？なんだこれは？」

クレイジーハンドは台の上に見覚えの無い青黒いエネルギーの玉を見つけた。

Mハンド

「タブーが残していった物のようだな。今度はお前の番だ。お前の力を見せてもらおう」

Cハンド
「うむ。」

そういうとクレイジーハンドはその玉を握りつぶした。…すると

???
「……我を目覚めさせたのはお前か。」

どこからか声が聞えて来た。
だがその束の間、クレイジーハンドが突然黒いオーラに包まれた。

Cハンド
「ぐあああぁぁぁ!!!」

Mハンド
「な、なんだ?まさか・・・タブーか?」

マスターハンドは恐る恐る訊いた。以前の悪夢を思い出しながら…

Cハンド

「フフフ…そうだ。我の名はタブー。一度は世界征服を試みたが失敗に終わったのは言うまでも無い。
だが！この破壊神の体を乗っ取った我に敵などいない！！さあ第二の世界征服の始まりだ！！覚悟しろ！！」

クレイジーハンドは狂っていた。タブーに憑かれ、心も体も乗っ取られ、タブーへの抵抗すら出来なくなったクレイジーハンドはマスターハンドへの敵意を表した発言をしている。

Mハンド
「くっ…。おのれ…おのれえええぇぇ！！」

マスターハンドは気合をこめてクレイジーハンドへ殴りかかった。
しかし・・・

Cハンド
「ふっ。無駄なことを。」

そう呟くとクレイジーハンドは黒いオーラをマスターハンドに絡ませた。

Mハンド
「何・・・！？」

Mハンド
「うぅぅぅ…　ぐはっ！！　何故だ？力が抜けていく…創造の化身としての力が抜けていく…そんな、バカなぁ！」

Cハンド
「甘いな…。我には敵わないと言ったはずなのに、自ら突っ込んでくるとはな。お前の力はもらって行くぞ。八ッ八ッハッハッハ！！！！」

Mハンド
「待て！！我の力で何をする気だ！？」

Cハンド
「フッ、世界征服に使うだけだ。安心しろ。征服が終わったらこの力お前をで楽にしてやる。お前もまだ使い道はある。まあ無駄話はこの辺にしてこの力を試してみよう。ハアアアァッ！！」

そう言うとクレイジーハンドは力強く指を鳴らして巨大な剣を作り上げた。そしてその剣でマスターハンドを斬りつけた。

ズバァ！！

Mハンド
「うぐっ！！」

剣は見事にクリーンヒットし、マスターハンドに深い傷を負わせた。

Cハンド
「フッ、見事だ！！では次は…」

そう言うとクレイジーハンドは何か特殊な力をこめて剣を握りしめて破壊した。

ばきっ！！

Cハンド
「やはり見事だ。では行くとしようか。グァッハッハッハ！！！」

マスターハンドはタブーに創造の力を持って行かれてしまい、
気が付けばただの巨大な右手でしかなかった。

Mハンド
「待て・・・どこへ行くんだ！？」

Cハンド
「フン、今の貴様には関係の無いことだ。愚かなでくの坊はそこで大人しく眠っていろ。せいぜい良い夢でも見るがいい。さらばだ！！」

そう言うとクレイジーハンドはどこにあるのやら闇の空間の出口からどこかへと出て行った…

Mハンド
「バカな…」

そしてマスターハンドはそのまま何も出来ずにぐったりと気を失ってしまった…

序章　～タブーの復活～（後書き）

読んでくれてありがとう。
これからも連載していきます。

つまらなかったらゴメンね

第1章　～平和な戦いからの異変～（前書き）

ここから本格的にこの小説が始まります。
お楽しみに～！！

第1章　～平和な戦いからの異変～

「さあ、始まるようですね」

「そうね、楽しみだわぁ」

ここは空中に浮かぶスタジアム。

このスタジアムの観客席で2人の女性が楽しげにお喋りをしていた。

白いドレスの姫ゼルダとピンクのドレスの王女のピーチだ。

彼女らは今から始まる試合を心待ちにしていた。

ピーチ
「私はマリオに勝って欲しいわぁ。何度もお世話になってるんだもの～。」

ゼルダ
「あら、わたしが応援するリンクも負けてないわ。」

ピーチ
「どちらが優勝するか楽しみね」

そんな楽しいお喋りの途中ゼルダが突然顔をしかめて言った。

ゼルダ
「…もうあんなことは起こらないわよね？」

ピーチ
「あら、ゼルダったらそんなこと心配してるの？もう亜空軍は滅びたのよ？どの道またタブーみたいのが攻めて来たって大丈夫よ。今の私達なら、たとえお月様が攻めてきても大丈夫よ」

ピーチはやさしくゼルダを宥める。

ゼルダ
「そうね考えすぎだわ、楽しく行きましょ♪」

ピーチの言葉を聞いて安心したゼルダの顔に安堵の笑顔が戻りピーチも安心したようだ。

？？？

「なあなあ、だれが勝つか賭けでもやらないか？当たったら一気に大金持ちだぜ！？」

楽しくお喋りしている女性たちにとてつもなく下品な男が話しかけ始めた。ワリオだ。

ピーチ

「ちょっとなあに？あなたと一緒にいると私達まで下品に見えるからあっちに言っていてちょうだい。」

ワリオ

「なんだよ！！せっかく俺様が誘ってやってるのによ！！俺様も仲間に入れてくれよ！！」

ゼルダ

「でも今は私たちだけの時間を下さらない？私はピーチと一緒にゆっくりと試合を見たいから悪いけど後にしてね。」

ワリオ

「あ～！！そうかそうか俺様は所詮のけ者だよ！！あっちに行ってればいいんだろ！？」

ピーチ

「もう分かったからあっちへ行っててよ。」

ピーチの言葉を聞いてワリオはふて腐れた様に2人から離れていった。…と見せかけて、

ワリオ
「俺様をのけ者した罰だ！！喰らえ！！」（ぷぅ～～～）

ワリオは相手にされなかったことに対して怒って2人におならをかけた。そして「ざまあ見ろ！！」と吐き捨てて去っていった。

ピーチ
「きゃあ～～！！くっさぁ～～～～い！！」

ゼルダ
「ケホッ、ケホッ、ひどい臭いですね」

2人がワリオに不満を漏らしているとスタジアムにアナウンスがかかり始めた。

アナウンス
「レディースアンドジェントルマーン！！今回も熱い戦いが幕を開

けたぁー！！」

ピーチ
「ふう、やっと始まったようね。・・・・・・・・なんかまだ臭い…。」

アナウンス
「さあ、ではルールの確認です！！今回は８人制のトーナメントバトル！！組み合わせはこちら！！」

マリオ　ー　デデデ
カービィ　ー　リュカ
ヨッシー　ー　ピット
ディディー　ー　リンク

ピーチ
「マリオとリンクは…決勝で当たることになるわね」

ゼルダ
「そうね、お互いに勝ち進むといいわね。二人の決勝が楽しみね。」

そして第一試合の二人の選手が入場してきた。

マリオ
「ひゃっほう！！」

デデデ
「やってやるぞい！」

ピーチ
「あ、マリオだわ！！頑張って～～！！」

ピーチはマリオの登場を心底喜んでいた。

アナウンス
「さあ！！お互い尋常に…。一回戦スタート！！」

試合が始まった。

ピーチ
「マリオー！頑張ってぇ！！」

ピーチの応援に応えるようにマリオの猛攻が始まった。

マリオ
「行くぞ！！ファイアボール！！」

ボン、ボン、ボン、

デデデ
「あちゃ、あちゃ！！何するぞい！！」

マリオのファイアボールが炸裂し、デデデのガウンに燃え移った。

ゼルダ
「見事ですね～」

デデデ
「おのれ～。反撃ぞい！！喰らえワドルディぞい！！」

デデデは力強くワドルディを投げつけ、まわりを驚かせた。

ゼルダ
「でもやっぱりデデデさんも強そうね」

ピーチ
「マリオも苦戦するかしら？」

マリオ
「なんの！！」

だがしかし、マリオはワドルディに向けてスーパーマントを翻し、デデデにワドルディをぶつけて見せた。

デデデ
「痛っ！！やってくれるぞい！！」

ピーチ
「流石マリオね！見事だわ～」

ピーチが感心するなかマリオに反撃をしようとデデデがハンマーを掲げた。

デデデ
「ここからワシの反撃ぞーーい！！」

…だがそんな意気込みもむなしくマリオの更なる連弾に飲み込まれる一方だった。

マリオ
「いくぞ！」

マリオは走って一気に接近したかと思うとスライディングを決めた。さらにそのままの勢いでメテオナックルを決め、そこからさらにヘッドバットをかました。

…だがまだ終わることなくスーパージャンプパンチへと流れるように決めていった。

「ぐうう、もうここまでかぞい…」と呟きながらふらつくデデデに対してピーチとあの男は大喜びだった。

ピーチ
「きゃ～～！！マリオってやっぱりすごいわね！！」

ゼルダ
「これなら決勝まで進めそうですね～。」

ピーチ
「あら？何行ってるの？マリオは優勝するのよ！」

ゼルダ
「でもリンクも負けてないわよ～。」

2人がのんびり話していると、2人の会話を切り裂くようなあの男の声が地鳴りのように響いた。

ワリオ
「がっはっは！！金だ金だ！！マリオがスーパージャンプパンチを繰り出せばコインが飛んできて儲かるぞ！！行けー！！もう一発決めろーー！！」

ピーチ
「なんなの？まだここにいたの？　お願いだからあっちに行っててよ。あなた邪魔なの」

ワリオ
「なんだなんだ？お前らもう一発お見舞いさせたいのかあ？」

ゼルダ
「いい加減にしないと怒りますよ？」

ワリオ
「へへーん！知るかあ！やっぱりもう一発喰らえ！！」（ブウウウ

ウウ）

またしてもワリオが2人におならをかけて去っていった。

ピーチ
「ケホッ！！もういい加減にしてよ！！ケホッ！ケホッ！臭っ！！」

ゼルダ
「こんな下品な人初めてです。ケホッ、ケホッ。」

ピーチ
「で、マリオは・・・、」

ピーチは試合に目を向けるとマリオがデデデにとどめを刺しているところだった。

マリオ
「とどめだ！！ファイア掌抵！！」

ボボーン！！

デデデ
「ぐわああ！」

アナウンス
「勝負あり！！　勝者マリオーー！！」

ピーチ
「やったーー！！マリオが勝ったぁ！！」

ピーチはマリオの勝利を心底喜んでいた。

マリオ
「ナイスファイト！」

デデデ
「ぬぬ～！おまえなかなか強いぞい！！このワシを負かすとは大した者だぞい。」

そして選手たちはお互いに握手を交わしてスタジアムから去っていった。

ゼルダ

「勝ちましたね～。」

ピーチ
「よかったわ。つぎもきっと勝ってくれるわ♪」ピーチ

だがそんな2人の会話を切り裂く下品な声がまた響いた。言うまでも無くワリオだ。だが今回は何かが違う。ワリオが悲鳴を上げていた。

ワリオ
「ぐあああ！！離せよ！！離せって言ってるだろ！！」

ピーチ
「何なの？ワリオったらしつこいわね！！…あら？」

ゼルダ
「今、確かにワリオの声が・・・・・・。でもいない…。どうかしたのかしら？」

ピーチ
「離せとか言ってたわ。何かあったのかしら…？でもまあいいわ。ワリオったらあんなに酷いことしてくれたんだから、きっとバチが当たったのよ。ほおって起きましょう。」

ゼルダ
「そうね・・・きっとそうよね。」

ピーチたちもおかしいとは思ったが散々酷い事をしたワリオを気にかけることはなく、ワリオはほったらかされてしまった。

しかも皮肉なことにワリオの異変に気付いていたのはピーチ達だけだったため、ワリオはだれにも助けてもらえなかった。

そしてワリオは助けてもらえなかった。

たとえクレイジーハンド（タブー）にさらわれても…

第1章　～平和な戦いからの異変～（後書き）

もし何かおかしい所や
口調がいまいちなどの
訂正するところがあったらどんどん行ってください。

第2章　～一人目の犠牲者～

ワリオ
「うう…。」

ワリオは限りなく広がる闇の空間の中にポツンとある台の上で目覚めた。

ワリオ
「あれ？あれれれ？ここはどこだ！？俺様って何してたんだっけ！？」

ワリオはぼんやりと考え出した。ただでさえ働かない頭を懸命に働かせて。

ワリオ
「え～と…あ゛～～っと？あぁ！！思い出せねえ！！」

ワリオは思い出せないことに苛立ち地団駄を踏んだ。そのとき！

チャリン……。

ワリオのポケットから一枚のコインが落ちて何も無い空間に寂しげにコインが落ちる音が響いた。

ワリオ
「コイン……。あ゛ーーー！！思い出した！！このコインってスタジアムでマリオが技と同時に飛ばしたコインだ！！そうだ！俺様はスタジアムに居たんだ！！そしたらいきなりバカでかい手に掴まれだんだ！！で、その後に…！！　・・・その後に？…ああ！！やっぱり思い出せねえ！！俺様ってどうなっちまったんだあ！！」

何度考えても思い出せないことに苛立つワリオの目にぐったりと倒れている大きな右手が写った。

ワリオ
「ん？んんん？？あれって俺様をこんな所まで連れてきた手だよな！！くそぉーー！！」

わけが分からずに混乱したワリオはその巨大な右手へ突進した。

ワリオ
「おいこらぁ！！俺様をこんな所に連れてきやがって～！！起きろーー！！」

しかしその右手はピクリとも動かなかった。ぐったりと倒れたまま。

ワリオ
「くそぉ！！俺様の攻撃でも起きないとは、まさか死んでいるのか？・・・ん？こいつ手の甲にでかい傷があるぞ！！　・・・よ～し！！食らえぇ！！」

ワリオは右手にある傷に目がけてパンチを繰り出した。すると動かなかった右手がピクリと動き出し、フラフラと言葉を発した。

Mハンド
「うう・・・・・・・・・・・・我はいったい何をしていたんだ？うっ！！この傷は確か・・・。そうだ、タブーの仕業だったな。」

ワリオ
「おいおいおい！！お前！！俺様を元の世界へ戻しやがれ！！」

ワリオは起き上がった巨大な右手（マスターハンド）に文句を言いながらキックを繰り出した。

するとマスターハンドはゆっくりと宙へ浮き上がり、ワリオの姿を確認した。

Mハンド
「なんと！！そなたはワリオではないか！なぜここにいるのだ？」

ワリオ
「あ？俺様のことを知ってるのか？まあ有名人だから無理もないな！！。…って俺様をこんな所に連れて来といて何言ってやがんだ！！早くもとの世界へ戻しやがれ！」

マスターハンドはまだ頭（？）がはっきりしなかったがワリオの言葉を聞いて理解した。ワリオはきっと自分をクレイジーハンドだと勘違いしているのだと。

Mハンド
「ワリオよ。そなたをここへ連れて来たのは私ではない。そなたを連れて来たのはおそらく私の相方のクレイジーハンドだ。私はマスターハンドであってクレイジーハンドではない。実は今クレイジーハンドはタブーに憑かれて狂っている。そのためタブーの計画にそなたが巻き込まれたと思われるのだが…」

ワリオ
「よくわかんねえや。で、なんでお前は俺様の名を知ってんだよ？」

Mハンド
「逆に聞くが…。そなたはもう亜空軍の事件を忘れたのか？」

ワリオ
「亜空軍の事件だと？・・・ん！思い出したぞ！！そうだあの時に俺様をこき使いやがった手の化け物だな！！
後で働かせた分キッチリ請求してやるからな！！もちろんすぐに払わなかった分の延滞料金も込みだからな！！で、とりあえず今は俺様を元の世界に戻してくれよ！相方ならそれぐらい朝飯前のウンチより簡単だよな？」

Mハンド
「朝飯前のウンチか…私にはそっちの方が難しいような気が…。おっと話がそれたか。しかしワリオよ。済まないが今の私にはそなたを元の世界に戻す力は持っていないのだ…。」

ワリオ
「あ？なんでだよ」

未だに状況が理解できないワリオにマスターハンドが分かりやすく説明した。

ワリオ
「ふ～ん。やっぱよく分かんねえや。でもとにかくお前は今ただの化け物で役立たずって訳だな。…ん？
てことは？…俺様が元の世界に戻る方法は無いってことか～～！？
おいおいおい！！どうしてくれんだよ～！！俺様は戻りたいんだよーー！！」

？？？
「戻らせてやろう。」

やっと状況が理解できたが、混乱して叫び散らすワリオの元にどこからか声が聞えた。マスターハンドに似た声だった…。

ワリオ＆マスターハンド

「誰だ！？」

Cハンド
「フハハハハハ！！私だ。そうだ、タブーだ。それにしてもワリオよ、久しぶりだな。元の世界に戻りたいようだな。安心しろ。パワーアップして戻してやるぞ。」

どこからともなくクレイジーハンドが現れたのだった。

ワリオ
「あ？お前が噂のクレイジーハンドか！？おい！！俺様は戻れればそれでいいんだよ！！パワーアップして戻るってどういうことだよ！？また変なことするんじゃねえだろうな！？」

Cハンド
「何を言うか、お前を常に切り札状態にしてやると言うことだ。どうだ？ワリオマンなら金稼ぎにも好都合ではないか？　・・・おっとそうだ！！私がこの役立たずの代わりにお前にコインを支払うとしよう。さあどうだ？今なら本来払う額の5倍払うことにするぞ？これでも乗らないと言うならお前はこの闇の中で一生を過ごすことになるだろうがな…。」

ワリオ
「へっ！！5倍だなんてやれるモンならやって見やがれ！！」

Cハンド
「そうか…ならば」（パチっ）

そういうとクレイジーハンドは徐に指を鳴らした。すると…、

ジャラジャラジャラジャラジャラァ！！！！！

突然ワリオの目の前にとてつもない量のコインが現れた！

ワリオ
「うおおぉぉ！！金だ！！金だ！！お前やるじゃねえか！！やっぱこんだけの金があるんだから元の世界に戻らねえとな！！おい！！左手！！何でもいいから戻しやがれ♪」

金を見たワリオは一瞬で我を忘れて浮かれてタブーの持ちかけた怪しい話に乗ってしまった。

Mハンド
「くっ・・・ 我の力をこんなことに…。」

Cハンド
「そうか。行く気になったか。ならばまずお前をパワーアップさせることにしよう。」

クレイジーハンドはそう言うと金に浮かれているワリオを掴み上げ、そのまま握り締めた。

ワリオ
「痛て！おい、もっとやさしく包めよ！！俺様はデリケートなんだぞ！！」

Cハンド
「フンッ！！」

パアアアアアアア！！！

クレイジーハンドがワリオに力をこめると光とともに無数のスマッシュボールが現れた。

Mハンド
「ワリオ…。もうだめか・・・。」

マスターハンドの言葉もむなしくクレイジーハンドが手を離したと

きにはワリオはワリオマンになっていた。しかも微量だが何か悪いオーラを帯びている。

ワリオ
「うう。俺様は本当にパワーアップしたみたいだな！！じゃあ早く元の世界に戻してもらおうか！」

ワリオは奇抜な格好でタブーに再交渉をした。しかし…、

Cハンド
「黙れ。」

ビシャアアァァァァ！！

そう言うとクレイジーハンドはワリオに暗黒の稲妻を落とした。

ワリオ
「ぐふっ！」

するとワリオの体から悪いオーラが更に大量に溢れ出した。

ワリオ
「…ぐあああぁ！！」

Cハンド
「成功したぞ！！さあワリオよ！！もう我の計画はお前の頭に叩き込まれたはずだ！！行け！！ワリオマン！！」

タブーがそう言うとワリオは何も言わずにこの闇の中から出て行ってしまった。

Mハンド
「タブーめ…。」

Cハンド
「どうかしたか、でくの坊。悪いが我も暇ではない。また行くところがある。お前はここで留守番だ。」

Mハンド
「くそっ・・・。」

そう言うとクレイジーハンドはまたどこかへ行ってしまった。

Mハンド
「ん？なんだこれは？」

マスターハンドはタブーが何か綺麗な玉を落としていったのを見た。

しかしこれは一体何なのか…

第3章　～現れない戦士たち～

ワリオマン
「がっはっは！！金があれば何でも出来るぜ！！」

タブーに洗脳されたワリオはタブーの計画にのっとり、空中スタジアムに戻っていた。

ワリオマン
「さ～て、適当にさらって来ればいいんだよな。」

ワリオはタブーに暗黒の稲妻で洗脳された時に亜空軍事件にかかわった戦士たちを適当にさらって来るように頭にインプットされたらしい。

ワリオマン
「じゃあ、ここらで適当に探すとするか！」

ワリオマンはマントを使ってスタジアムの中央へ飛んでいった。

その頃観客席ではピーチとゼルダが第二試合が始まるのを心待ちにしていた。

ピーチ
「次の試合はカービィ対リュカね。」

ゼルダ
「カービィにはあの時お世話になったわね。」

？
「うむ、確かにそろそろだな。」

２人の姫の横で一人の男がスタジアムを眺めながらつぶやいていた。
その声はワリオとは違い、賓のある渋い声だった。

ピーチ
「あら、メタナイトさん。お久しぶりですね。あなたも観戦ですか？」

メタナイト
「然様。カービィを見たくてな。カービィの戦い方は参考になるからな。」

そう、彼はメタナイトだった。クールで女性陣に人気らしい。

ゼルダ
「もし良かったら一緒に見ましょう。」

メタナイト
「かたじけない」

メタナイトはゼルダに誘われ一緒に試合を見ることにした。

そして、そうこうしていると試合の開始を知らせるアナウンスが流れ始めた。

アナウンス
「さあ！！ただいまより第二試合の始まります！！両選手入場！！」

まずはリュカが入場してきた。

リュカ
「僕はこの戦いを通してもっと強くなるんだ．．．」

リュカは弱々しい自分を変えたいと思い参戦したようだ。

アナウンス
「続いてカービィ選手の入場です！！」

ピーチ
「はじまったわね♪」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・。しかしカービィは出てこなかった。いくら待っても。

アナウンス
「カービィが出てこない・・・。ここは仕方ありませんがリュカを不戦勝といたします。ご理解ご協力のほどお願いいたします。」

アナウンスを聞いて会場がざわつき始めた。

メタナイト
「何故だ？何故出てこない？」

ゼルダ
「本当にどうしたのかしら・・・？」

メタナイトやゼルダが本気で心配するなか、能天気な者もいた。

ピーチ
「でもカービィのことだから試合なんて忘れて食べ物を追い求めているなんてことは？」

メタナイト
「う・・・うむ。確かにカービィなら有り得ない事ではないが…。」

気付けばざわついていた会場もピーチと同じ考えでまとまっていた。

アナウンス
「では・・・。少しアクシデントがありましたが第三試合を開始いたします。」

ゼルダ
「まあ、今回は残念ですが、ここからは純粋に観戦を楽しみましょう。」

メタナイト
「うむ。そうするとしよう。」

そして何事も無かったかのように第三試合が始まった。第三試合は

ピット対ヨッシーだ。

アナウンス
「さあ選手の入場です！！」

まずはピットが入場してきた。

ピット
「いくぞ！！勝負だ！！」

アナウンス
「さあ、続いてはヨッシー選手の入場です！！」

メタナイト
「やっと始まるな。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

しかしヨッシーも出てこなかった。いくら待っても…。

アナウンス

「おっと。ヨッシーも出てこない…。ここは仕方ないですがピットを本日二度目の不戦勝といたします。」

またしても会場がざわつき始めた。

メタナイト
「ヨッシーまでもか！？」

ゼルダ
「本当に何があったのかしら．．．？」

ピーチ
「まあまあ、きっとカービィと一緒に食べ物を追い求めてるのよ。ヨッシーならよくあるわ。」

気付けば会場のざわつきは、またしても腹ペコ説で丸く治まっていた。

メタナイト
「うむ．．．。悪いことが起こらなければ良いが…。」

ゼルダ
「まあ今はこの説を信じましょう。さあ！次はリンクの出番よ！」

メタナイト
「リンクか。彼の剣の扱いも楽しみだな。」

アナウンス

「さあアクシデント続きでしたが第四回戦を開始いたします！！」

そしてまた何事も無かったように試合が始まった。

アナウンス
「まずはディディーコングの入場です！！」

ディディー
「ウキーー！おいらの力を見せてやるぞ～！！」

ディディーは格好つけたように転がりながら登場した。

アナウンス
「さあ続いてリンクの入場です！！」

ゼルダ
「ついに来たわ！」

しかしリ…………………………………………………………………………。
ンクは現れなかった。カービィやヨッシー同様に…。

ゼルダ
「リンクまで…。どういうことなの・・・？」

メタナイト
「さすがにおかしいぞ・・・。」

ピーチ
「まあ落ち着いて。きっとリンクも食べ物を求めて……」

ゼルダ
「リンクはそんなに食いしん坊じゃないわよ！！」

ピーチ
「そ…、そうだったわね・・・。」

今回は腹ペコ説が通用するわけも無く会場はざわめいていた。

ゼルダ
「何が原因なのかしら…？」

メタナイト
「控え室が怪しいな…。行って来る。」

ゼルダ&ピーチ
「あ、待って!!私も行くわ!」

メタナイト
「そうか…。ならば危険は承知してくれ。……と言うまでも無いか。」

そう言うとピーチはパラソルで、ゼルダはフロルの風で、メタナイトは滑空しながらスタジアムの中央へ飛び、選手たちの出入り口から控え室へ向かっていった。

ピーチ
「ここが控え室のようね…。」

彼らの進んだ先には三つの控え室があった。

1つは控え室A。　マリオ、リュカ、ピット、ディディーの控え室だ。

もう1つは控え室B。　カービィ、ヨッシー、リンクの控え室だ。

そして残りの1つはVIPルームだ。デデデ専用の豪華な控え室だ。

メタナイト
「うぬ。見るからに控え室Bが怪しいな。入るぞ！！」

ゼルダ
「ええ。行きましょう」

（ガチャッ）

メタナイトが控え室の戸を開けた。　すると・・・。

？？？

「ガッハッハ！！3人もさらえば追加ボーナスでガッポガッポだぜ！！」

賓のない男がカービィとヨッシーとリンクのフィギュアを抱えて控え室の片隅にあるブラックホールの様な所へ入ろうとしていた。

メタナイト

「待て！！何者だ！？」

メタナイトは愛剣である宝剣ギャラクシアを構えながら気合をこめて叫んだ。

ワリオマン

「あ？俺だよ！ワリオだよ！！」

その賓のない男はワリオマンと化したワリオだった。

メタナイト

「ワリオ…。なぜワリオマンになっているんだ！？何をする気だ！！またタブーの仕業か？」

ワリオマン
「けっ！ワリオマンが罪なほど格好良いってことか！？嫉妬も程々にしとけよ！！で、俺様は金のために働いているだけだ！　タブーなんて知ったこっちゃねえ！！　とりあえずこいつらを何だかって言うでかい左手に渡せば儲かるんだぜ！！」

ワリオマンと化したワリオは怖いものなんてなかった。

ゼルダ
「ワリオ．．．。よく分からないけどリンクやカービィを返して！！」

ピーチ
「そうよ！！返しなさいよ！！」

そのときワリオはニヤりと不敵に笑いを浮かべた。

ワリオマン
（フッフッフ！！これは良いことを思いついたぞ！！）

ワリオマン
「へっ！！返すもんかよ！！おい！それよりお前らもフィギュアになりやがれ！！こうすれば俺様はもっと儲かるぜ！！」

メタナイト
「なんだと！？」

ワリオマン
「行くぜえぇぇ！！」

そう言うとワリオはどこからかダークキャノンを取り出した。

ワリオマン
「発射ぁ！！」（ズキュウウン！！）

ダークキャノンから黒い矢が飛び出し、メタナイト目がけて飛んでいった！

メタナイト
「甘いな。」（バサリ）

しかしメタナイトはディメンションマントでキャノンの矢をひらりとかわした。そしてその矢は後ろにいるゼルダへ飛んでいった。

ワリオマン
「くそ～！！かわされちまったかぁ！！　んん～？でも後ろにゼル

ダがいるぞぉ！！　行けえ！！そのままゼルダに当たれえぇ！！」

ワリオは一度は地団太を踏んだが、ゼルダに当たるという期待に胸を膨らませていた。

ゼルダ
「ふん、そんなもの大した事ないわ」（キラン！）

しかしゼルダはネールの愛でキャノンの矢を跳ね返した。

ワリオマン
「くそぉ〜〜〜！！ひらひらと避けやがって〜〜！！」

ワリオはまたも地団太を踏んだ。　…しかしそのときだった！！

ワリオマン＆メタナイト
「なに！？」

ブシャアアア！！

…………………………

……………ことん。

なんとゼルダが跳ね返した矢はゼルダの前にいたメタナイトに刺さってしまった。そしてメタナイトはフィギュアになってしまった。

ピーチ
「きゃ！！メタナイトが！！」

ゼルダ
「私ったらなんてことを…」

ワリオマン
「へへーん！！これは儲けたぜ！！さあお前らも大人しくフィギュアになりやがれ！！」

ワリオはメタナイトのフィギュアを拾い上げたかと思うとまたダークキャノンを2人に向けた。

ワリオマン
「さ～て、また跳ね返されちゃ面倒だな。跳ね返せないようにパワーMAXで行くぜ！！」

ダークキャノンに力が溜まっていく。そしてパワーがマックスになった。

ゼルダ
「もう、ここまでかしら…。」

ピーチ
「誰か・・・。」

ワリオマン
「終わりだあ!!」

そして!!

ブシュウウウゥ！！

しかし！

ワリオマン
「うわ！！なんだ！？」

なぜかワリオが戸惑いの声を上げていた。あれだけ有利な状況にいたワリオが戸惑っていた。
そのとき誰かの声が聞えた。その声の主はワリオでもピーチでもゼルダでもない、この場に居ない者の声だった・・・。

？？？
「危なかったな。」

？？？
「間一髪だったぞい。」

ピーチ
「この声…。まさかマリオ…！？」

ゼルダ
「デデデさんの声もしたような…？」

まさにそうだった。声の主は紛れもなくマリオとデデデだった。しかしなぜ彼らがここにいるのか、姫達はもちろん理解できなかった。

マリオ
「危なかった。ピーチ姫、お怪我はありませんか？」

ピーチ
「ええ一応無事よ。しかしマリオ、何故ここに？」

ゼルダ
「デデデさんまで何故ですか？」

デデデ
「なにやら隣の控え室が騒がしいと思ってマリオと見に来たらワリオが2人を攻撃しようとしてたぞい。」

マリオ
「だからとっさにポンプでワリオを妨害したって訳なんだ。」

ピーチ
「そういうわけだったのね」

ゼルダ
「なんとお礼を言ったらいいのか・・・。」

4人はそれぞれの状況を理解しあった。しかしそんな中一人苛立っている男がいた。その男は獲物をライバルに奪われてとても苛立っていた。

ワリオマン
「おい!!コラぁ!!何してくれてんだあ!!俺様のチャンスをどうしてくれるんだあ!!こうなったらお前ら全員フィギュアにしてくれるわ!!」

マリオ
「なんだって!?」

ワリオはそう言うとダークキャノンに手をかけた。

ワリオマン
「行くぜえ！！まずはパワーチャージだ！！」

そしてワリオはダークキャノンのチャージボタンを押した。

デデデ
「マズいぞい！！」

……しかしダークキャノンは動かなかった。

ワリオマン
「あれ？おかしいな・・・？オイ！！チャージだって言ってんだよ！！オイ！！何で動かねえんだよコラ！！」

ワリオはダークキャノンが動かないことに苛立ってダークキャノンを数回平手で叩いた。するとダークキャノンの表面から水が飛び散った。無論、この水はマリオのポンプの水だ。ワリオもこの水を見てマリオの水だとすぐに気付いた。そして、キャノンの異常とこの水との関連性にもすぐに気付いた。

ワリオマン
「水・・・。この水って・・・。マリオォォ！！この野郎！！お前

のせいでキャノンが壊れちまったじゃねえかぁ！！どうしてくれんだよオイ！！この野郎！！弁償しやがれ！！というか弁償代の代わりにフィギュアになりやがれぇ！！！」

マリオ
「何を言うんだ！？人をフィギュアにして売りさばく方がおかしいじゃないか！！俺はそれをやめさせただけだ！！」

ピーチ
「そうよ！マリオの言うとおりよ！それにキャノンが使えないならマリオをフィギュアにするのなんて無理じゃないの？」

マリオとピーチはワリオに激しい反論と一つの疑問を投げかけた。
するとワリオは得意げに答えた。

ワリオマン
「へへーん！！こんなものがあるんだよ！！」

ワリオはどこからか大きな金貨のようなものを取り出した。

ゼルダ
「それは一体・・・？」

ワリオマン
「教えてほしいか！？こいつはスマッシュプレートって言ってな！！これをぶつけられた奴はフィギュアになっちまうんだよ！！！ガッハッハ！！マリオめ！！恨むんならフィギュアになってから恨むんだな！！」

ワリオはそう吐き捨てるとスマッシュプレートを円盤投げの要領でマリオに向けて投げつけた。

ワリオマン
「おらぁ！！」

ピーチ
「マリオが・・・！」

ギュゥイイイイイィィン!!!

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・コトン。

ワリオマン

「ガッハッハ!!決まったぜ!!」

ワリオはマリオをフィギュアにした事を喜んでいた。・・・しかし。

マリオ

「う~ん?俺はもうフィギュアになったのか?」

一同
「えっ！？」

マリオ
「あれ！？俺・・・、生きてる！？」

ワリオマン
「あぁ！？何でだ！？俺はお前をフィギュアにしたはずだぜ！？」

ゼルダ
「まあ！！あれをみて！！」

ゼルダは突然マリオから少し離れたところを見て指を指した。何かを見つけたようだ。そして皆はゼルダの言葉に反応してゼルダの指すほうへ目をやった。

ピーチ
「えっ・・・！？どういうこと！？」

そこにはデデデのフィギュアが転がっていた。

ワリオマン

「ちっ！！水で手が滑っちまったみたいだぜ！！まあデデデのフィギュアを儲けたから今だけは見逃してやるか！俺様のそんなに暇じゃねえんだよ！！じゃあな！！次に会うときが楽しみだぜ！！」（チクショー！！スマッシュプレートがもう一枚あればマリオをフィギュアに出来たのにな．．．。）

マリオ
「待て！！フィギュアを返せ！！」

ワリオマン
「なんだ！？このワリオマンに勝てると思ってんじゃねえだろうな！！かかって来るなら加減はしねえぜ！！」

ゼルダ
「マリオ落ち着いて！！さすがに無理よ！！」

マリオ
「くそっ．．．。」

そしてワリオはマリオ達に舌を出して挑発し、ブラックホールのような所へ入っていった。

マリオ
「くそっ！今は勝てないならば後を付けて隙を狙うしかないな．．．

。待て！！」

そう言うとマリオもブラックホールのような所へ入っていった。

ピーチ
「マリオ、行っちゃったわね・・・。」

ゼルダ
「これって、やっぱり嫌な予感がするわ…。皆に知らせなくちゃ！！」

ピーチ
「私も手伝うわ！！」

そう言うと二人の姫は控え室を後にした・・・。

第3章　～現れない戦士たち～（後書き）

ここからどうなるかが自分でも楽しみです！！

引き続き応援よろしくお願いします＾＾

第４章　～雇われし皇帝とキングの像～（前書き）

眠い…。現在ＡＭ３：０６です（笑）

第４章　～雇われし皇帝とキングの像～

ワリオは5体のフィギュアを抱えて亜空間へ戻っていった。しかし、ワリオは亜空間を見て驚いた。自分が亜空間を飛び出した時とはまるで景色が違っていた。そこには巨大な都市が出来ていた。タブーが創造神の力を使って創ったようだ。

ワリオマン
「おいおいおい！！ここはどこだよ！？あの巨大な手の野郎がいないじゃねえか！？」

ワリオがきょろきょろと辺りを見回していると、どこからか声が聞えてきた。

Ｃハンド
「我に用があるようだな。」

突然ワリオの後ろからＣハンドが現れた。

ワリオマン
「おお！！探したぜ！！とりあえず見ろよこのフィギュア！！すげーだろ！！5体も連れて来たんだぜ！！こいつらをやるから追加ボーナスくらいよこせよな！！」

Cハンド
「ほお、期待以上だったな。ご苦労だ。だがもうお前に用はない。ここでお前は終わりだ。」

ワリオマン
「終わりか。まあ儲けたは儲けた訳だ！！そんじゃ元の世界に戻ってこの金で遊びまくるぜ！！イヤッホぉーー！！」

ワリオは大金を手にして嬉しそうだ。しかしそんな嬉しさを破壊するセリフがCハンドから飛び出した。

Cハンド
「馬鹿なやつだな。お前はこの街の牢屋行きだ。元の世界に戻す気は無い。そこで一生過ごしてもらおう。」

ワリオ
「え？」

Cハンド
「まずは貴様の力を消し去るとしよう。ハアア！！」

Cハンドはワリオを力強く握り締めた。

第４章　～雇われし皇帝とキングの像～（後書き）

まだこの章は未完です。
諸事情により続きですが一度投稿します。すいません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2333y/

大乱闘スマッシュブラザーズX　破創の化身と希望の戦士たち

2011年11月23日03時53分発行